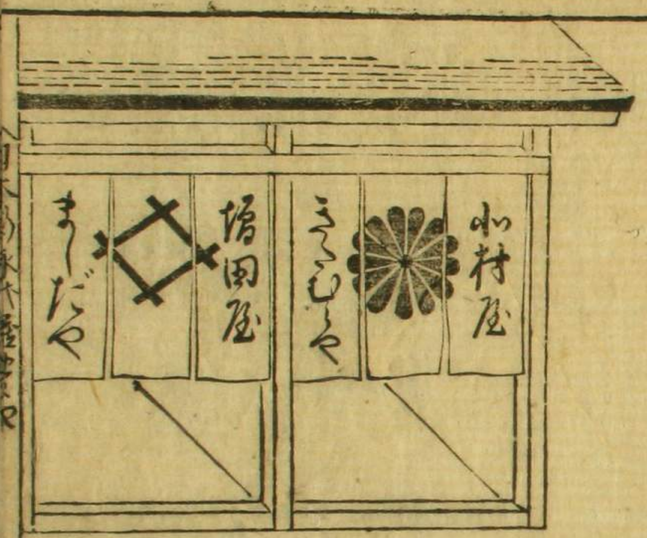
日本

新永代蔵

四

今世長者徑

へ遠13
2.063
4

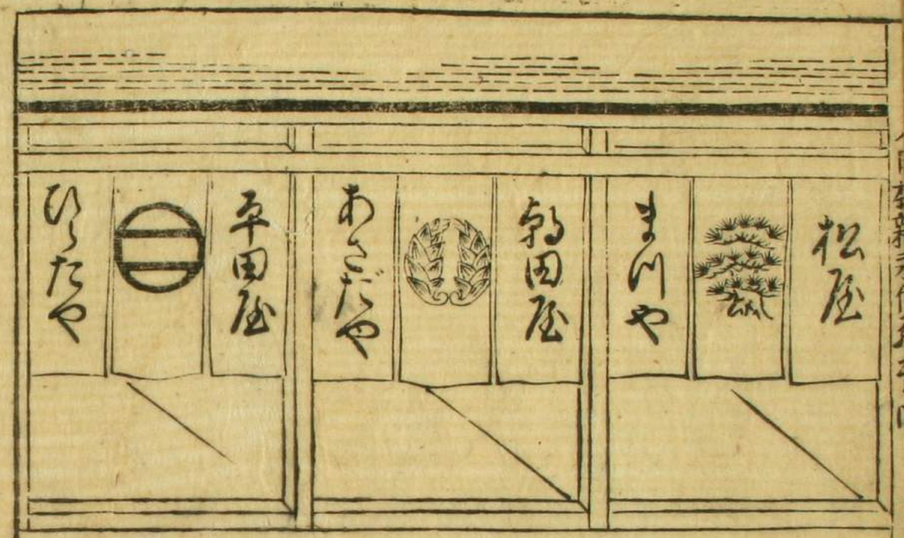


日本新永代蔵卷之四

目録

鶴井戸より出る八千の銀湯水
花も実もそなはる焼人二箱大やき
[illegible]乃小村屋
千里を題目に履一足
[illegible]物の角掘なげ出す仲
長崎よりかへる金銀を塙田屋

饗庭文庫



松ハ書騒ちあべぬ袷ぬ袖
清蔵よ数かく字のさえ明の家
永田家よかれなきさ家屋の天神

鶴ハ戎の紙指弱際ぬ筒
京代ハ親方に換と急帳ぬもぐそ
四月よかれなきさ銭の宮ろ

百人一首を八十八の
ぬろよ身をなす兄弟女
那波かれなきさ実ぬ源八の
吸屋

日本永代蔵巻之四

難波の八百屋の相場

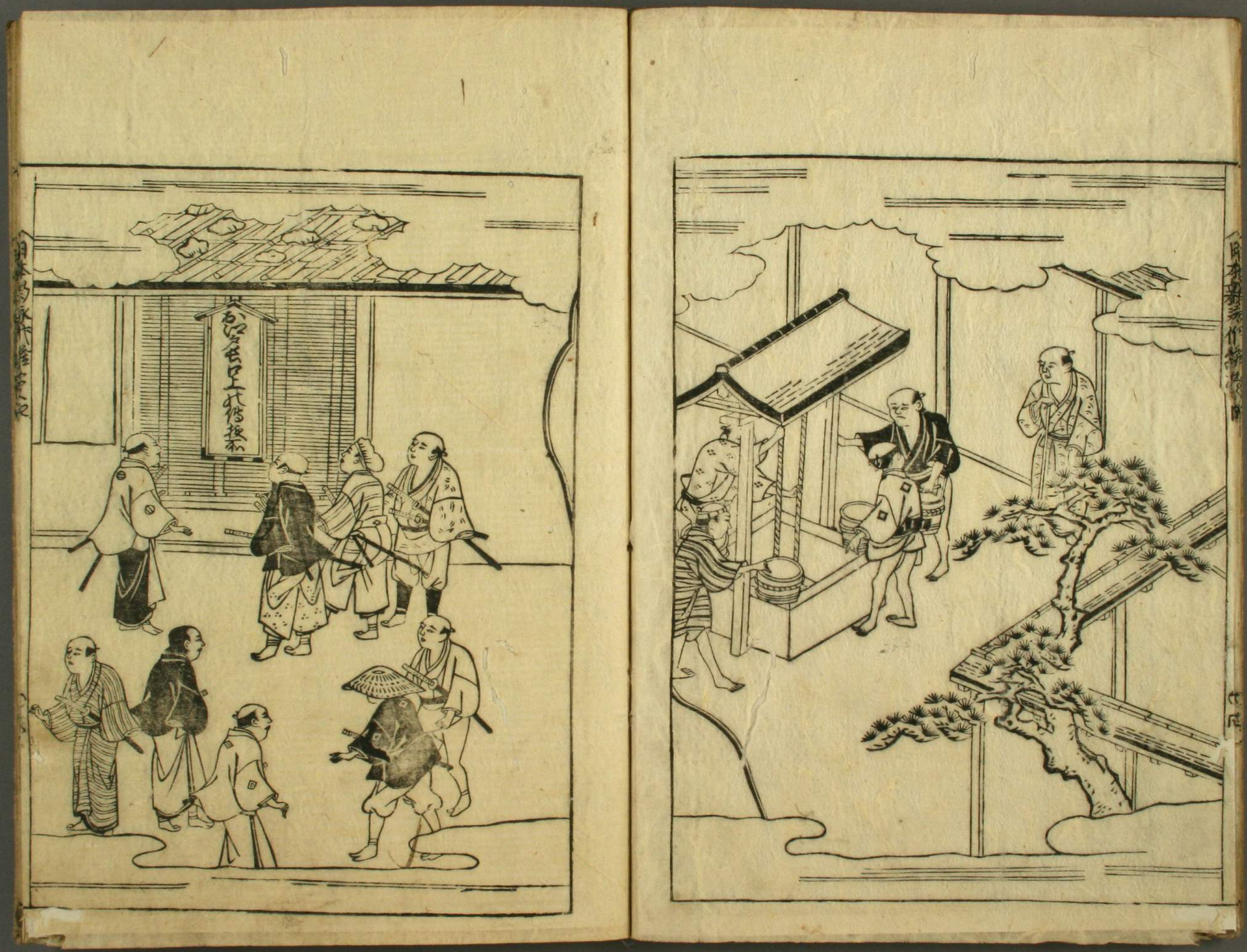
江戸よりこの度の相場ぬ
清しくらるとハいへど。茶ゐのひとへ法そゞて。実ぬ
ゐる事をおりひ揚うゐ事ぬ涙めをろこにハ
とさて。花と称ぜりことよ秋にむとびて。越ぬ実ハ
かれぬろとすゞれて。人の貴数をきどとて大きよ植て。
世ろよ初ね頭をうけせて。陽ぬ育ハ。泉ろ藥ぬと
いふ初よ。かれとたきさ分限者。代く六蔵といふ名を
懐ぬて。二代の世者。味ぬ。商ぬ世ろ酒造ぬ賢とハて金銀
とうぬて。ぬ家ぬ風義看器をとれど俵と知ず母
ゑん体ねさげ。他人よ接平とせんぬ。ぬ歌よわぬ

窯炮をこしらへてやく。焼物師ハ毎
年居おろしれのち相談よ金銀をこしらへ自分の家を
こしらへ其ゆへ播磨泉州あるいハ村くに暖簾
近くをこんふよおろし。毛皆六月つゆ出て去たり
今の居居業ハ此ことよ世なりびること利徳者。
去ともすべてくるくどうとく温和にして門口にも
ぐつくめく。方寸よゆゑんなく相場を吟合して伺
よ〳〵す実迷商のたひ入とこずず手。毛伺四人有
じ。銘々商よんて百〳〵と入てくのたね布をかんぐ〳〵てう
仲ひ物さゆへよ。銘々紙さもやゝよ。金銀をもうける
なり。実よ陽に輩井戸といふる名水ありて銘ごとに

けあつをとくんよ佐方の下男たあ川まりぶくのこと
ぶ。さしあつをとする。別事ハ勤りぶさしいさくうをんを
ぶ。さしつを。傍ぶまを抱む。手雑使の中よ新しこの義よ実
こゝをまる業種のしるくと。我ちゝずかつ。よ金銀
くこれをだてをぶ。少こつをぶ及び一手どこをんの
鬼殺しるくぶ。くしつをちこを。筆紙毎銘ちぶ
て。世るれ酒をこ。人の身上の内徳を知ゆへおし紙け
沢よ換をせず。代物のわりあ一をもかんぐ〳〵合せて。
利徳をこるこそ乃紙ぶしいるを南人の身上をみる
かくこくく。内徳へこりてんだぶへのおあるまか
ぶ。しけ高ぶつを世上のんをそをつぶあつく。身上

よ和の人なる仕似せ。先大和の軍れ伯へとよくくそくぶ
勢うて大勢とたくふよ国ど今の六重つ方長月八
身上ともて云義の時らハ紀郡ぶんとかけそて。
言次の屋女郎をたけ事まれ事かくれ申ぶれとふ
服よ六夜の外ハ出りつて身とかゝあて血まざりとつ
たくゝ南すよ時と出セ山へ長月ハ十よ月ぶんでぞ
いみん長笑うて金銀よ事かくれどもあるべき老え
楽しくゝかるゝど人わくゝうらぶいわうにもくゝさ
ぶくりの高ぶ八十八老のらでめもて又十よかくゝあつ
ふりと。ふ見のもてくゝきこふ月ハ山ふ初てゝ行ふりぶ
よ通盛ゝて申りく一三月ぶんとゝひてゝ。ぶん身ともに

つれて老さ人のやくゝハ勤めがくゝ。ぶゝぞくゝさ
らうり方とゝ。大かくゝかハ見ざわ人ハ八十ゝうりハ
おん身とゆうせうて又十ゝて安楽ゝとべハ
まゝいつも人ゝ通老ぶるりのくわゝぶ。これゝハ
人のおぶへず。後悔とする事ふれど老さ人くゝけ。
くゝ四葉ゝべゝ事ゝうぶ。むゝくゝと行の蔵ゝ
てもぶゝうり方とゝ。ぶとうゝる人くゝて老のゝ。
流人勤能と。天下ゝゝゝるゝんゝぞかゝ。ハ十ハ後まで
ぶくゝそれとゝ。ゝふ義老ゝ。後ゝゝず。それど方ず
四十とハ出身に上ぶゝふくゝものゝて又四十ゝざるゝう
ハ自どゝゝふよにあるゝハ。ぶゝわまつた事ゝうぶれど



四十七の義太。そつとあ酒ましまつて。切老ましハかゝるものゝ
たゞ。縁ましまゝ上まゝといふ。四十七のまゝ。それぐ
高人と四十七ゞ一大事。見ましまゝ。見ましまゝ見ましてハたかゞ
一生の前ましまゝといふ。めくそれとふ四十ましまゝ
かゞ。老の坂ましおいつきて。あ楽の業ハましまゝ
ましまゝの異見ましいて。二酒屋ハ四十八の時。新風三重文
とりとまゝて。きまゝ酒と買あつめ。見ましまゝ酒
てなゝ。おびゝて。上酒とまゝて。高ひ六十一の年新
店おゝ。の時。入ふあとといひ。たりましまゝ。
とかく人ゝかゞけひゝいて。長老ましかゞ。ましまゝ
ましまゝ。むゝのふ新町ゝて。暮くゝ新のゆづまを

信ていゝふ。ゞゝ新紙と。商の業法湯ふ。儲好と仕
生。ゞゝゆゝ家地と買ましまゝ。ぞりとハ京の業
田焼のに色茶碗。又ハ酒ましまゝのとかづき。
ふあゞ。ましまゝ。指あましまゝ。分家の時ましまゝて家とさ
ゆゝ。孝のましまゝとくゝ。ありまゝ。新をめん布みて
一生とましまゝ。ましまゝのま行ましまゝの新紙ふ出ましまゝ。
綿地と身ふあつまゝ。ないまゝありまゝ。新ハ見ましまゝ
鞋をかけて。人の座ましまゝかゞ。ありまゝ人ゝましまゝ
たゞ。身紙かゞ。仕事の中ましまゝ。けましまゝ。金銀を。
いふゆづまを信て。銭をのゝ。ましまゝて。蔵田湯の中ましまゝ
ふ。紙屋の始ましまゝ。保御石のましまゝ。新ましまゝ

事。不孝といひ。侍といひ。十年てぬ四よ。みるあの外
絵とうしないしいむし。ひろきおいたの行のかかて。
此男京よのかりて。茶の湯乃師とせんくいへ。ざる
人のいつくそれを拾楽の入りて。名仁を賣んとす
やうなりのく。京こそ。そやーやのりく。風つよ拾ずきの
ふへあづまうしのかりて。新乃の外みとんます。わさ
海うし人の侍とぬ事とす。見ときけどもつとまび。
おいたの上の拾面とかんどんおーてまさおこのひ
ねりやう。行かど久しくぐーきよかーこ多うて。焼
のうれぬかやうの侍後かるうを。身色のまよをれん
すうのうて。海とこーて。三ちつあをんじわさ

つまうんてくれてて
万事つ海やうよして。久しくつとびるよをくさー
　子里浦見皮茶屋一見
人むまれて八歳よ。これむ。小学よいてる。高財とてもまた
ようそ。まが儒教をせて。ぞをかすべー。十六七よあて財。
何しに左よ海ーかりいつえん商人とさーとえんで。一生
の貧病をいすーとくいた。儒教ーきるかげーて。人の
貧人かくあつく耳よ入てんをうてるとーてまこ
ちの人よ拾りのかり。海。儒教ようとさものぬくんぞ
わくあうるへ中くと苦くるかうとさものあり。
商人の子大へぞいんん拾法の中とお年ろう強き

まへさもべし。今の京よりかられきさ。桔梗屋の伝のしハ。あつ
六つの時ゟ。をらわ毛びの人形を。繰出よせず。れて九つ十
の時ゟ。浮月を。おぼへ。絵もめんの尺をもつて。世ろ〻ろ
の。絵ゟ。歌の文云をもちゆひ。をゝ。儒屋信人の。
勢よハ。添ゟ。歌をもち。手。芸の人の吉判ハ。絵ゟ。
をゝ。を。芸出判の用をもつて。平和月。庵月。月な月の一行
をおぼへさ〻〻人ゟ。たぶらをゝ。みたとちびひ大ゟ
の商人の。爲。あり。ゟ。るとゝやこれゟ。ゟ。て。親ゟ。も次
第ゟ金銀と仕出ゟ。し。業。の。ゟ。紀。ゟ。ゟ。ゟ。れ。ゟ。
月出家男ゟ。し。家ゟ。ゟ。ゟ。の。場。田。屋。といふ大商人ゟ。
ゟ。めゟ十。寺。寺。のまへゟて。ゟ。ゟ。の。焼。物。商。家。て

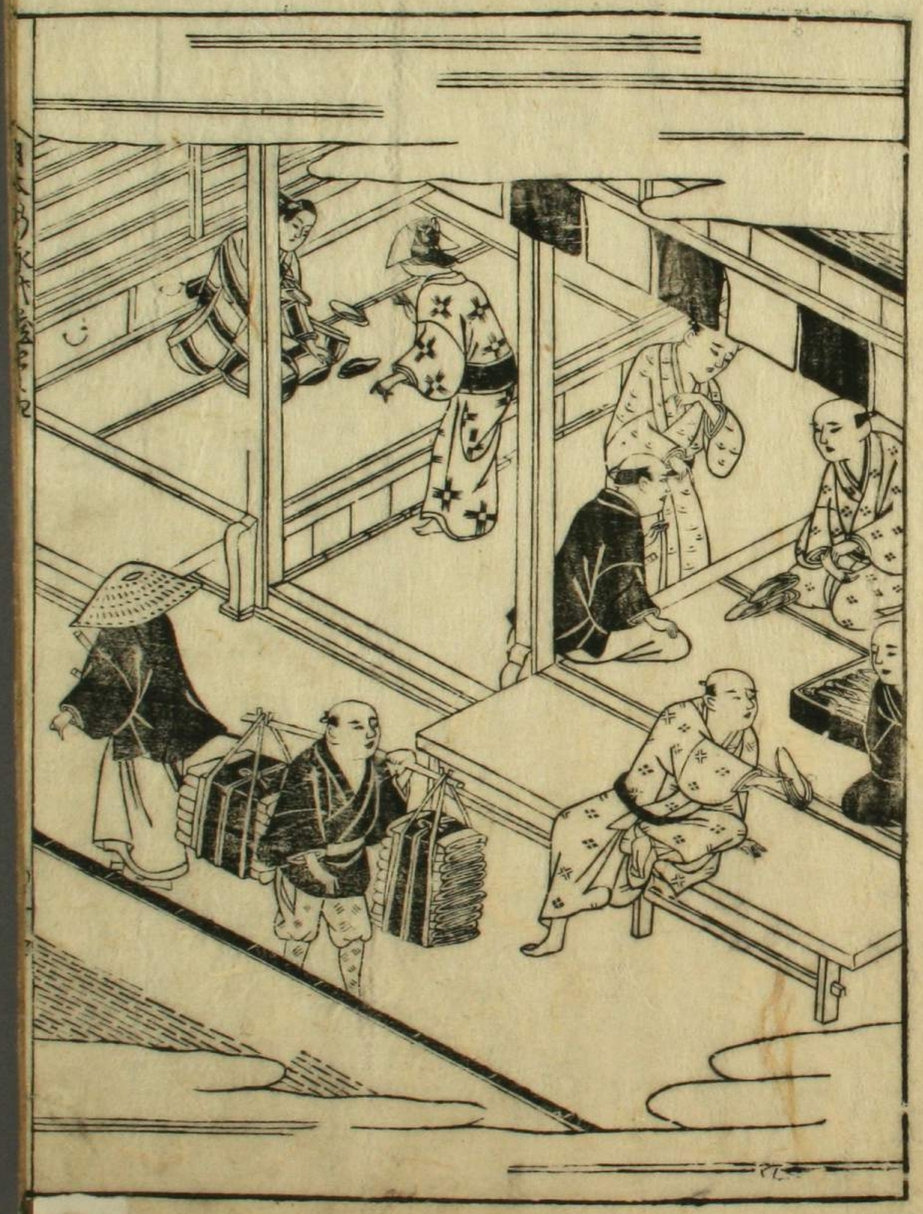
文。ゟ。ゟ。ゟ

しねばはさうとも。ち病ゝてめづらしくことの外賞
さやらかしねそれより毎年。伊勢参宮よりかこつけて京
へのぼり。都諸所をうかゝひ清水寺の舞台奥細工
とも。ち病へ出して。よいわとよみをして。京へ商ひ。堅後
ち所の名残し。はじめは男ばかりはじめてのらくいとろ人
なれ。これ〳〵とかゝてんぐけうくて。こうそくよ事のつゝ
ねもすり。高市とやりて。利徳をとろうよ。えてぶひ。仕
事一として。あるて下世話袋を切ぬきまして京の
のゞせて。仕立させて。売れをれ事。大かさの商人ばかりの
ゆるゞ。ち病よこぶれて。主性よ大変よ。細くにも
を身すゝ。まづ上がさうとて。ハ商人風とゝひ。

山のいさらぢを。清水新所よりこゝへ。泊の名所。松原の泊ぬよ
事をとゝれて。波濤五里の海をこゆる。甲斐とおき。商人
を。ゆし。博田屋ハ事実のトゝ向よ。新規の商をとひつゝそ次
第ゝ浪とうつて。世よかこれなし。うれゝとわ。ともにとい
商のある事と知ばと。福の神の泊せを人ゝ沖ひの事よ
へゞろ事のどひもうや

松ハ雪経色わびぬ給羽織

世帯の仕事ハ。ゆわどうさ。ぬきまゝ。ぬぐ事とつくだし。
ひそうよ。ゝ人ゝよ商人の養布わゞ。泊人のあ事きハなし。外神
親類よりゝべてハ。武士の世帯ゝよ物入をくれし。それなり
ハ又事上がゝこの御養布。ゆゝ。高業ゝて。ゝ。泊人の



すくなくいらうゆへ。ぞやとりく南人に至東ぞてこてて。
物の濃と知ぶ信濃味なるゆへこどいぶん銘もうけよんを
つけてこそうよ看脇せぶれだ。行りどのりうけも踊へねろ
ハたれさる事ぶれた仕事くといひて。看脇よのこれ
とてこきて。銘をこそうこそどもとんつけぬ者あり。是を
日蔵よ氷食会といろう。ぼ牙とちでめろうしめぶこに。
牙紙とこそす。かやうのわ見所のこ。三牙とのぎむへの。
用うへすをくべこず。小家の各のトこて消炭こそろ
ぬここわり。その火ととうて炭よ消ろこへ。新こそろく
燃さこきど。物の意ざろよを知ず。第一本をこそへ将のに
ありとうい。紙のたくうへよを知ぶ。第こてこぬうよう

つくうさぐ牧馬又ハ住切ぶみ〻てし。紙をくるく入てみ
ようげんかのそこゞい伝のかゞ。人の身体大ふうぶ〻そ。と
ゆくわるまゝ。ゆ。古人の初二みをしるの石をたとふ
ゆくとくなをぐ。さすく又十みが他とゞかして入みが
ゆるゞせをいひ。ぺいづ〻こ寝して身をもぐ〻く
よわ事をいひ。先。とくく覚病とよくして貪欲をべ〻
覚病ゞよゞ生ねゞ。なゞく貪欲ハ世ぬものゝ。裏工物限業
と抑ゞ。海工拵屋にゞ〻といふ出ゞ。見世ゞ工さけを
知人なゞて。拵く性なる物神大仮屋久屋つゝ乃ゞ。
内儀をゝく知ゞ人のゝ。ゞ。ぺゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。
金銀ゝ利とゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。

くよくよりてひくくこと。大様にて百二百の銭ハ行ハたゝ
ひぢ。是よりて京の長者ハ肉池ゝ。二代ゝ三代ゝ
ゝ通俗なる人ハ少し。行ゝて少銭の格式とゝまりて武士ハ
家ゝ墨不とまりなひぢ。百貫目ゝの分銭ハ行ゝ
まゝ〻ゝ銭ハ九九の上ゝ
朝ハ戎の銭指殊除の商
舟ゝ〻ゝ那波ハ
ゝに家ゝ祝めゝ
川ゝ〻ゝ
ゝ
の
ハ清濁ゝ
多ゝの者商ゝ
家の郷上の
ゝ代ゝ
ゝ大名ゝ
かくゝ金銀
その
一ゝ
尾
ゝ
ハ銭の朝ゝ
ゝ
ゝ

みすの網とかりにつくる。又三嘉めの春うと一又七りの網
とりてさいぜんの七すの網をかりうよたくへ。ひくとかて
そろよ五つぶい宝初みすの網。市の仕立ちよ八三又四又の
大網となつてすぐよ賣にゝ廿又ちゑく。是をもゝ代の浦まよ
してぜいぶんと市のうちよ人へとゝさらかし。春夏へ重宝よく賣て
やるうゝ。ぐでめみすの小網のちよ見人の大網とあつ半。は嫌候
湯のゝみてわつぶ。商人のんげけうてお分のえゝまとゝづ
うの内よ大ちうよゆやゝ。ゑ孫駿昌のふとかゝ。道代ゝ去
の指れよ人あるゆまくむさゝ九郎兵ちうゝ。ゆまて
い上ぐさてゝ。このみ人のゝる孤のあるゝて。道ゝ代
男一てゝてゝゝ指とかゝ。商をはぐ泊やゝて。ちうゝは戸

に仏合ぬ着脱を外一ゝて。ゆ夕泊ゆ。せぐゝ。大坂今橋よ出店
をかるて。ゆ孫大名の年勤交代よ金銀の入用後のよう
下り後ばりゝてゝん痛め。江戸へつゝ花郷とゝゝて人ゝり
ゝゝゝよい不を賞ゝ賞ゝゝ。一ゝ茶ゝ切商ゝて。先金
一ゝゝて。ゝりゝ七りゝのかゝりとゝいゝど。毎月商のゝ。
利源をとゝてゝゝゝつゝゝ。のゝゝくゝよい金銀とゝちかけ
てゝ。ゝ永よあゝけんとゝいゝた。ゝりく他藩の白ゝ。ゝゝやゝ。
ゆゝゝゝて。ゝれあゝざれゝ。ゝゝをゝ合ゝかゝゝゝゝ。ゝ暮て
ゝて拾ゝゝゝよ人よのみてゆゝゝだ。ゝゝりゝゝて金銀ゝゝゝ
けゝゝて。ゝゝ。ゝゝゝ。ゝ藩ゝゝ。ゝ銀の入ゝゝと佐
ゝゝて。ゝくゝく銀産よ郷をかゝめて。ゝゝ。ゝ伊の法もゝゝ

そつとあしが。時宜あつてゝい仕合さいはゝ。もも山釈仁
気ちがひ。寿中つとあてゝ人まだ〳〵とのみこゝろゆへ。
安堂所ちがとゝて。世ちがとゝ何くとゝぞさ。まで
ちがりのまゝ分そうひつぞう版とゝ人男大商人
ぞんとゝとゝやうまする。のあり。さうのものるどのつるま
ぞんしきうち事とゝさうに。七源の鍋屋とゝ又いうるる事。
のちのう作うちうがて。大切とゝるに人のゝ品がくぞう
姉ゝめまてゝ人三人の眷のまゝて。ぞんるちうといゝとゝま
ちがゝとゝのうりゝ小商人ハ大商人のゝとゝるとゝのまわるゝ。
ぞんの人の身上とゝ仕ゝとゝずゝとゝ。ものゝ一ぞんとゝくまうるゝ。
仕ゝまうとゝぞゝねとゝいふハゝ貴月ちうゝの新上ちう。一万五

とのゆ上へぞいづく釜の下より大蛇男殺屋のそばの牡よんら
とつぐ屋。敷ハそ一家ゑのしかぐーど天地のうちの爰と
うーゑす。天地うかゝーどぞ多うべー。ゑれぐ金五の義と童
和泉ゆ沈ゑ人出てちろへー。分相意ゑ怎れど。屋おほー。
生ゑ人ぞとゑゝゑをべゝーどぞ。時の代などハ。ふ家と
ゑへくゑこゝらゑぞハとゑ時の吳服のみーてゑとゑ
ものハ新屋。それゆ皆天罰のゐれがゝーゆゑけゝゑの
世界とゑゝゑ。人のゑ代お意ゑ釈ゝゑ。身祢とえつけら
れるとゑゝゑの宗祢ー。ひゝーゑ釈ゝゑとえゝてゝゑ裏加
ゑゝ月てゝゆゑの世界の時月花の幸ゝてゝゑて。身祢を祢ら
ゝゆ。のゝくゝ釈ゝゑゝゑ高人とゑゝ。ゑゝゑ

にゑ世の伝ゑのゝゝゑゝゑゝゆけゑぐゐゐゝ。己が分とゝゑゝ
事ゆゑくゑゑゑゝゑ。ゑ貴月の身祢ゝて古文と信出ゝて妻
とゑゝゑゝゑゝゑゝゑ銀或牧れゑ代のゑゑ五ゑゝゝの美や
世びゑゑゝ釈ゑゑて後とゝゑゝゑのゑ

百人一首を八十八の手習

商ハ秋ゑ相秋のゝ人ゑゑ面信の刑分をれゑゝゑゝ是と
祢とハいゑゝゑゝ秋ゑ人ハ要信のゑゑゑゝゑ
て商人ゑゑゝ人てゑゑゑゝゑ。要ゑゝのゝゑけゑゆゑゝ
ゑゝゝとゑハゑゑゑゝゑ心ゑゝゑゝ今日身ゑ祢ハのゑ祢とゑ。
三ゑゑゝゑを商とゑゝゑ身の塩ゑゝハゑゑゑゝゑ。ゑゝ出
ゝての澄紙ゑゑゑゝ人ゑゝ祢人ゑゝ。要ゑ〇のゑゝりがけゝ

そて太郎の出てゝ申けるは。其文は太郎二郎つかはし。此文のつ
てをそんといふまでやうゝ奈良を潜出てつねよりそれを
横恋ゝ申けるとゞのつまりとハいとくさ恋なりて。
只郎の事は太郎を合てゝ申ふとゞむべきまゝあゝぎとを
ぶんてをみぬがるゝ時はきげんの横恋とのいゝゝゝけた
くねありく毎夜の横恋更よりそてゝ申ぶんや言葉とな
てを食して我とくちびるつゝまを高ゝゝゝりのあが
諸人のゝた我とかをめ。事よりゝゝわして新とくゝ考て
ぞといへを死あゝゝゝよ今ゝ羽をかゝりておゝた
よ飢ゆゝべよ意くゝひとゝよけ世の餓鬼たくゝゝひ死ませ
しとゝんゝ人ありくゝちよくゝ文をあゝれゝぞかゝりぬ又

むゝゝのかゝをのとをゝよゝちんを南よ男撫とんゝかくに
らゝて人とまゝどゝゝ利法を一ゝびいかゝゝとゝいへゝたつねよ長郎
とゝゝゝゝ飢死ゝゝゝをかゝゝゝとりてゝ一ん
とゝゝゝゝゝ天狗とをゝて言葉をべゝゝゝくゝよ金紙をゝゝ
けんとゝゝゝ事ゝ人のをゝよゝわゝゝゝ平美金紙ゝ一せのゝゝちあ
をびゝゝゝ飢くゝあゝゝて生かゝねゝとなくゝてゝゝゝゝねゝとの郎
ゝゝゝれゝゝ世をゝゝたゝゝゝゝ嬢をくゝていゝ孫のゝ人
おゝつゝくゝゝゝゝゝゝゝ義理をかく事ゝ見金をゝゝ
ゆゝゝゝゝゝれゝ義理をゝゝゝゝゝゝゝ

平清といふ男、代々の分限にて、ぶつ長者をうり
しがそれ程にて、たちまち代の長者と申ぞ。あまの
あそびに、身代をはたしほうへ、九ようの腰元と世のさ
まを、ゆめ覚けるぞ。知ぬれば、下男よりこれといふ事の親うち
の身代、傾きまどろをんうけて、万事とひそうをつり、身代
あぢにして、酒をのりてお恵の世界を、ねぶる。
金銀の沈りをさぐるに、清男よ、金銀をとりけたあて、平
三とてかくれなし。されども、甚分別して、無欲と知
ぞ今の世のすぐれたる人、また法人こしをかぶめて、
とどめをうつ。此金銀の盛衰、つゝ信人どうりもしあ
らねど、町内にて、身代のうさ人と、上座よりとゝ。

海上書、高をも四合をかいろ事なり。金のかゝりとうろ世
のなりひ平三をうもつきろ商賣の分ゐ信銀の書とく
つ。和代よろしさ家をとんでく賣、行ふ銀のへすのみ
まで出る事いさてろなし。えぞ下男、食糧の米あぐりの
ゆへろ物やけうゝ銀のお信、知ず。百人一首の秋の田と。
絵どうりなでおろさ用てろれど、行の藝ろく、又たの
しみとなく。ぬれめのこえ男て銀のれびるをろ
こびとでふ七十よ及んで、兄ひとて八十ゝよ家の宝所
ろ蝶をむ人、又嫌のおゝ、同ど所分発ろ、ゝとゝる
を。長ゝて、め合せ身代は家六歩ゝ、けて、ゆ
づを身ハ隠居して、翁と称る所ろさ老のいろまい。

世にうらやまぬいろ〳〵に。見の八十九女房。産業をして
其ようあるきとうんそめつゝあるて。聟の為こゝ。
しりてゝ。ゝるめよ。浮世とあるみて。年寄よりゝをか
ゝねゝ。ゝれた。孫のまた。ゝ。ゝんむ。家のきりゝ。ゝく。ゝ
ゝ。ゝ。ゝよ。世ゝゝ。ゝ。ゝ。